教科「生活」新設までの小学校低学年における動物飼育

鳩 貝 太 郎

1 はじめに

我が国の小学校ではウサギやニワトリなどの小動物を教材として飼育しているという諸外国にはない特徴がある。鈴木哲也氏（東京未来大学）は、明治後期からの学校飼育動物の導入過程やその位置づけなどについて資料に基づいて詳細な調査を行っている（鈴木 2010, 2012a, 2012b, 2014）。鈴木氏は、小学校にウサギの飼育舎があるのは「社会的影響としては、農業恐慌によって副業として農村地域でウサギを飼育した可能性、ウサギが投機対象となって都市における飼育が広まった可能性やそして輸出及び戦争における国内の毛皮や肉の需要の増大といった影響が、教育的な影響としては全国的な郷土教育の推進、農山漁村地域の学校における自力更生教育、学校設備としての飼育小屋の普及といった影響」が関連していると思われるとしている（鈴木 2014）。

我が国の理科教育では明治期から観察等を重視しており、第4学年から始まる理科では生きた動物の観察は行われていた。小学校低学年での理科は、昭和16（1941）年に小学校を「国民学校」に変えた時に「理数科」が設置され、そのなかの科目として理科が第1学年から設置されるようになった。

本稿では、昭和16年に設置された低学年理科から、低学年の理科と社会科が廃止され新教科「生活科」が新設されるまでの低学年での動物飼育の扱いについて振り返ってみた。

2 国民学校低学年理科「自然の観察」

日中戦争が拡大、長期化した昭和16年

3月に国民学校令が公布された。これにより義務教育6年制から初等科6年と高等科2年の8年制になった。また理科教育関係者の悲願であった低学年理科が設置された。しかし文部省は低学年の児童用の理科教科書を作ると「教室において教科書の上で指導するようなことに傾きやすく、かえって悪結果を生ずる恐れがあるのである」として第1学年から3学年までの児童用教科書は作らず教師用書「自然の観察」だけを作成した

「自然の観察」の総説では、「第1, 2学年は、理科の指導の初歩段階であって、児童の眼に触れ、関心と興味とを持つような対象を時とところとに応じてとらえ指導するのである」、「各季節における自然界の事物現象についての印象を得させ、経験を積ませることが中心になる」としている。また、植物を栽培させ動物を飼育させることは「その植物・動物に愛着を感じ、その形態・生態等にも自ずから注意をしなければならぬようになり、手入れなども進んでするようになる。すなわち考察・処理の態度・方法がみについてくる。また、栽培・飼育は相当長期にわたって努力してはじめてその成果が見られるものであるから、これによって持久的態度が養われる」としている。

そして、各学校には以下の施設があるものとして指導例を記載したとし、これらの施設が無い場合は工夫を凝らしてなるべく趣旨に添うように努めなければならないと記されている。

校庭、池（キンギョ、フナ、コイ、メダカなどが飼ってある）、ニワトリ小屋、ウサギ小屋、花壇、畑

この当時は、各学校にキンギョ、メダカなどのいる池やウサギ小屋、ニワトリ小屋があったと考えられ、無い場合には設置することを求めていた。また、ウサギやニワトリの世話は上級生が担当していたと思

われる。

第1学年を対象にした「自然の観察」は2巻に分けて編纂され、以下の内容項目となっている。またその境は10月中旬を想定している。

自然の観察 1		自然の観察 2
第1課 学校の庭	第10課 池や小川の動物	第19課 秋の種まき
第2課 記念の木	第11課 麦畑と虫取り	第20課 とり入れ
第3課 庭の花	第12課 雨あがり	第21課 もみじ
第4課 庭の動物	第13課 しゃぼん玉遊び	第22課 笛
第5課 春の野	第14課 アサガオ	第23課 鳥の羽
第6課 春の種まき	第15課 バッタとり	第24課 落葉かき
第7課 木の葉遊び	第16課 お月さま	第25課 冬の衛生
第8課 草花とり	第17課 ウサギ	第26課 日なたと日かげ
第9課 草花植え	第18課 野菜と果物	第28課 春を待つ庭
		第29課 方角
		第30課 草摘み

上記の第4課「庭の動物」の内容の一部を紹介する。

<p>第4課 庭の動物</p> <p>目的</p> <p>学校に飼ってあるウサギ・ニワトリなどにえさを与えさせて、親しみを持たせ、これらを愛育する念を養う第一歩とする。</p> <p>要項</p> <p>「学校の庭」で学校に飼ってあるウサギ・ニワトリなどに教師が餌を与えさせて見せ、この次には児童に与えさせることを告げておいた。この課では、児童にえさを与えさせて、ウサギ・ニワトリに親しみを深め、自ら進んでその生活の有り様を見るように仕向けるのである。</p> <p>このようにすると、ウサギ・ニワトリに対する親しみや見方がだんだんに深くなる。この態度は進んで一般に生き物、ついには一般のものにまで及ぶようになる。</p> <p>子どもには、子どもらしいものの見方・考え方・感じ方あり、それを伸ばしていくように導くことが肝要である。児童に大人のようなものの見方・考え方・感じ方をさせようとするのは誤りであって、すでに出来上がった科学知識を教えこむようなことをしてはならない。</p> <p>この課で取り扱うものにはウサギ・ニワトリに限るものではなく、これらを中心に、ハト・コイ・フナなど、適当に選択してよい。</p> <p>指導例</p> <p>(以下は省略)</p>
--

第17課「ウサギ」では、春から見てきたウサギについて気付いたことを出させてから、えさを与えさせてウサギと遊ばせるようにし、ウサギのふっくらした肌触り、

温かさなどに気づかせ、更には坂を作って登り降りさせたりして動作の面白さを見せたりするようになっている。

第17課 ウサギ

目的

ウサギを校庭に出して、えさを与えたり、運動させたりして親しんでいる間に、ウサギに対する理解を深め、愛育の心を盛んにさせる。

要項

児童は入学して間もなく「学校の庭」や「庭の動物」の課でウサギを見て、えさを与え、その後も絶えず学校のウサギになれ親しんできたことであろう。ここではウサギを校庭に出し、えさを食べさせたり、抱いたりなでたり、運動をさせたりして、ウサギとともに遊ばせる。その間に、体の恰好、えさの食べ方、歩き方、はね方、ひげの動かし方、赤い目の美しさ、毛のやわらかさ、体のあたたかみなど、いろいろのことがおのずからわかり、これらに興味や驚きを感じることも少なくないであろう。

このようにして、ウサギに対する親しみは一段と増し、愛育の心は深められるのである。

ウサギと一緒に遊ばせているうちに、ウサギが春から育ってきた様子の記憶をたどらせる。こまかいことは覚えていないであろうから、印象に残っている著しいことだけにとどめる。それでも、今後育ち方の経過に関心を持たせるのに役立つであろう。

指導例

(以下は省略)

なお、第2学年の内容には特にウサギやニワトリは教材としては取り上げておらず、日常の学校生活の中で高学年の児童たちが飼育しているウサギやニワトリに興味関心を持ち続けることを期待しているものと思われる。

戦時体制への即応と皇国思想の強化のために小学校を国民学校という名称に改めた時代であっても、「自然の観察」では児童の自発性を重んじる考えが重視され、その記述内容は現在の指導にも通じるものとなっていると言える。しかし、国民学校と共にスタートした低学年理科の「自然の観察」は成果を見るに至らないで戦後の教育改革の波に飲み込まれた。

3 昭和20年代の低学年理科

昭和22年3月に「教育基本法」、「学校教育法」が公布され、小学校6年、中学校3年の義務教育制度がスタートした。学校教育法では、教育内容は学習指導要領によることと定められたため暫定の学習指導要領が急ぎ編集された。理科については、昭和22年に「学習指導要領理科編(試案)」が作成された。

その中で、理科の目的を達成させるために身に付けさせたい能力として比較観察や記録など10項目が列記され、その中に「植物の栽培、動物を飼育すること」「生物を愛育すること」が併記されている。

第1学年の理科の最初の単元「動物の生活」の指導目標は「身近にある動物に親しみと愛好の気持ちを起し、動物の生活の様子を正確に観察する態度を養う。」として

いる。指導方法には児童の活動として 19 例が示されていて、教師自身の中から選んでいかに工夫して指導するかが求め

られている。そこに示されている児童の活動例のうち動物飼育に関わるものを以下に抜き出した。

1. 学校で飼っている動物を見る。
2. 公園・動物園・牧場等へ行って、飼ってある動物を見る。
6. ミミズを教室で飼って観察する。
7. ハツカネズミを教室で飼って観察する。
8. キンギョ・メダカ・フナ・タニシなどを飼って観察する。
9. カエルを箱庭で飼う。ハイを捕って食べさせる。
10. オタマジャクシを教室で飼ってみる。
11. カブトムシ・カマキリ等を飼ってみる。
12. アオムシ・ケムシ等を捕ってきて飼育箱で飼う。
19. ツバメの巣を観察する。

このように児童の活動の例を示すとともに指導した時の評価についても、興味をもちすすんで見ようとするか、親しみをもって世話をするかなどの項目が具体的に示されている。

第2学年の「動物の生活」の単元の指導目標は、「生活の環境にある動物に親しみと興味を持ち、その生活の様子を正確に観察する態度を養う」とし、季節の移り変わりや生き物の変化に注目させている。飼育する動物の事例は1学年のものにカタツムリ、カイコなどが加わるが、「ウサギの子・ヒヨコ・オタマジャクシ・ハツカネズミなどを育てて、動物が成長し、えさをたべることを見る」というような具体的な表記になっている。

なお、第4学年では「うさぎのせわ」、第5学年では「鶏の世話」が単元として独立して取り上げられており、どの学校でも指導する内容となっている。

4 昭和30年代の低学年理科

終戦の混乱が治まった昭和33年10月に、文部省は教育課程の基準として文部大臣が公示すると位置付けた小学校・中学校の学習指導要領を示した。この学習指導要領では各教科の持つ系統性が重視され、基礎学力の充実が図られた。

小学校第1学年と第2学年の理科の目標と内容で動物飼育に関わるものは以下のように明記されている。

第1学年

目標(4)学校や家庭などで育てている草花や動物の世話を手伝い、それらをかわいがることに喜びを持つようにする。

内容(1)

エ 飼っている動物の観察と世話の手伝いをする。

(ア)うさぎ・にわとり・小鳥などのような親しみやすく飼いやすい動物にえさを与えたり、運動させたりなどして観察し、興味と関心を深め、これをかわいがる。

(イ)きんぎょやめだかなどをガラスの水そうに入れてえさを与え、その食べ方や泳ぎ方に気づく。きんぎょには、大きさ・色・形の違ったものがあることに気づく。

第2学年

目標(4) 育てやすい草花や身近で興味ある動物の世話をさせ、それらをかわいがり、よく育てようと努めさせる。

内容(1)

ウ 田畑の虫の生活に関心をもつ。

(イ) 田畑で採集した虫をビンや箱に入れて、えさを与え、食べる様子を観察するとともに、それらの虫の生活に興味を深める。

エ 池や小川(海)の生物を観察する。

(イ) 池や川(海)で採集したいろいろな動物を水草とともに水そうに入れて観察し、それぞれの形や泳ぎ方などについて違いがあることに気づく。

第1学年、2学年の理科の栽培・飼育では、栽培・飼育の経験を基に生き物に関心を持ち、自発的に観察したり考えたりなどして「気づく」ことを重視しており、教師が話などにより結果だけを教え込むような指導を避けなければならないとしている。戦前の「自然の観察」の趣旨は新たな学習指導要領においても引き継がれていることに注目したい。

5 昭和40年代からの低学年理科

学習指導要領はほぼ10年毎に見直され、教育内容の充実が図られてきた。文部省は昭和43年7月に小学校・中学校の学習指導要領を全面的に改訂した。この改定で低学年理科の内容は生活単元的な学習よりも系統学習が強調され、知識・理解に重点が置かれるようになった。

第1学年の理科の内容項目では「(2) 身近にみられる動物の特徴を理解させる。」となり、動き方や形、食べ物や食べ方の違い、卵から生まれるものと親に似た形で生まれるもの、ウサギやニワトリの身体は暖かいことなどが取り上げられている。第2学年では「(2) 虫、魚、カエルなどの居場

所や食べ物、動きなどを理解させる。」となっており、何を理解させるかが明記されているという特徴がある。

昭和43年改訂の学習指導要領は知識の伝達に偏る傾向があるとの指摘が多くあり、昭和52年の改訂では、内容を精選してゆとりある充実した学校生活を送れるようにすることが強調された。その結果、低学年理科は授業時間数が減り、内容は大幅に削減された。

続く平成元年の改訂では、社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成を図ることを基本的なねらいとして、指導する内容がさらに精選された。そして第1学年と2学年に新教科「生活科」が設置され、低学年の理科と社会科は廃止されることになった。

6 おわりに

平成元(1989)年3月に小学校学習指導要領が改訂され、新しい教科としての「生活科」の内容が公表された。生活科の学年目標は2学年に共通するものとして次のように示された。

(1) 自分と学校、家庭、近所などの人々及び公共物とのかかわりに関心を持ち、集団や

社会の一員として自分の役割や行動の仕方について考え、適切に行動することができるようにする。

(2)自分と身近な動物や植物などの自然とのかかわりに関心をもち、自然を大切にしたり、自分たちの遊びや生活を工夫したりすることができるようにする。

(3)身近な社会や自然を観察したり、動植物を育てたり、遊びや生活に使えるものを作ったりなどして活動の楽しさを味わい、それを言葉、絵、動作、劇化などにより表現できるようにする。

新教科「生活科」の構想からこの学習指導要領作成に至るまでの中心となり、最初の生活科担当の教科調査官となった中野重人氏は自著「生活科教育の理論と方法」の中で次のように述べている。

「学校教育における体験の重視ということ、生活科は 21 世紀への学校づくりの一つのポイントとして問題提起しているのである。教科書を中心に頭だけで学ぶ学校ではなく、具体的な活動や体験を重視して体全体で学ぶ学校を求めているのである。学ぶことの大切さは、誰もが指摘するところである。人間形成にあって体全体で学ぶこと、すなわち『体得』の重要性は、改めて指摘するまでもないことである。」、「生活科は体で学ぶ教科である。それは、まさしく体得の教科なのである。体で学ぶということは、具体的には例えば、見る、調べる、作る、探す、育てる、遊ぶなどの学習活動である。」

教師用書「自然の観察」から昭和 33 年の学習指導要領までは具体的な活動や体験が重視されていたが、アメリカにおける「教育現代化運動」の影響を受けた昭和 43 年の改訂では知識が重視されることとなった。しかし、次の改訂ではゆとりある学校生活が強調されるようになり、生活科の新設に繋がったと言えよう。現在では生活科は児童の活動や体験を重視し小学校に定着している。一方、現在は教材のデジタル化が推進され、デジタル教科書の普及も進んでいる。児童たちは自然体験や飼育

体験などがない状態で、映像などで分かったような気になっている傾向があるのではないだろうか。今こそ「自然の観察」や生活科の理念などに立ち返って学校での動物飼育の意義を考えてみたいものである。

【参考文献等】

- ・鈴木哲也（2014）「昭和 10 年代の理科教育における『学校飼育動物』を用いた教授内容と実践記録」東京未来大学研究紀要
- ・鈴木哲也（2010）「明治後期から大正期における『学校飼育動物』の導入過程」秀明大学紀要
- ・鈴木哲也（2012）a「昭和初期の理科教育における学校飼育動物の位置づけ」東京未来大学紀要
- ・鈴木哲也（2012）b「『自然の観察』におけるウサギを用いた実践内容の解明」秀明大学紀要
- ・中野重人（1990）「生活科教育の理論と方法」東洋館出版社
- ・文部省著、日置光久・露木和男、一寸木肇、村山哲也編集・解説（2009）「[復刊]自然の観察」農山漁村文化協会
- ・国立教育政策研究所教育研究情報データベース「学習指導要領の一覧」<https://erid.nier.go.jp/guideline.html>